

“竜の眼” — 資料と短信 —

台湾屏東市における葬礼
— 祖母の葬儀記録を中心に —

蘇 素卿*

1995年7月21日晚、日本時間10時頃に、妹から祖母が危篤との国際電話があった。22日の朝に再び前夜の11時30分に亡くなったとの電話があった。私は祖母の喪に駆けつけるため、25日の午後、屏東の家に着いた。「慈制」と書いた（母親が亡くなった時、「慈制」と書くが、父親の場合は「厳制」と書く）黒文字が入口の柱に張られ、門の入口に真っ赤な布がぶら下がっていた。家屋外に臨時霊卓が設置され、何段かに重ねた机には一番上に祖母生前の肖像が掛けられ、下には花束、果物、蠟燭、「神主牌」（臨時位牌）、香炉、白いご飯、おかずと親戚友人の名を書いた供え物などが並んでいる（写真1）。私は霊卓の前に線香を上げてから、家に入った。

応接間の右側（註1）には黄色絹布で覆った冷蔵庫（註2）があり、その中に祖母の遺体が置かれている（写真2）。冷蔵庫の外形はステンレス製で、上の蓋はガラス製である。ガラスの上から祖母の顔が見える。

祖母の顔はくっすり眠っているかのようで、怖さは感じなかった。しかし、閉じている唇の間から固まった血が少し見えた。

祖母の名は李秀といい、民国8年（1919）1月7日、高雄県に生まれた。18歳で祖父蘇昌と結婚した。四男三女を育てた。38歳の時に初めて祖母となった。内孫13人、外孫7人がある。67歳の時に曾祖母となった。内曾孫4人、外曾孫1人がある。祖母の一生は平凡だが、親戚の何方かも祖母は「好命人」という。去年（1994）の七月に中風になり、身体的にも精神的にも急に酷いショックを受けたそう

だ。民国84年（1995）7月21日に亡くなり、享年77歳であった。台湾の習俗では70歳以上で亡くなった場合は長寿亡者というから、訃報はピンク色である（付録1）。

台湾地域における葬送儀礼は閩南と客家の両系統に分けられる。『台湾地区現行喪葬禮俗研究』によると、「客家傳礼、閩南傳服」、「客家属儀礼系統、閩南則為朱子家礼系統」である。又、亡くなった時間や地方、宗教信仰、経済能力の違いによって、葬送儀礼は更に多様である。今回祖母の葬送儀礼は葬儀社と相談した結果、仏教式法事を行うことになった。父親は長年商売をし、道教の行事に従い、家の仏壇にも毎月陰暦の一日、十五日に「拜拜」をする。道教式の慣例によれば、陰暦の七月には葬送儀式を行わないのに。対して、仏教儀式にはそのタブーがない。しかも、法事儀式を行う過程では、道教儀式と比べると、比較的に厳粛で、近所迷惑が少ない。本報告では、私は亡者の孫として葬送儀式の過程を参与観察し、記録したものである。又、台湾省政府民政廳から発行した『台湾地区現行喪葬禮俗研究』（1983年）を参照し、台湾葬送儀礼は社会形態の変化に従い、省略されたり、新たに付け加えられた儀式の変化について考察する。以下は、祖母が亡くなった晩から出棺日の期間に採用された伝統的な葬送習俗を時系列的にまとめたものである。

7月21日～25日

（私は未だ帰省していない期間だが、家族の話をまとめた内容である）

7月21日夜10時頃、病院から祖母の病状が悪化し、危篤状態であるという連絡があった。長男の父親、母親と隣に住んでいる三叔、三嬢（三番目の叔父、三番目の叔母）は急いで病院へ向かった。留守番をしている弟と堂弟たち（三叔の息子）が高雄、台南に住む父親の兄弟たちに電話で知らせ、わが家の応接間にあるソファ、机、屏風などを地下室へ運んだ。間もなく、父親と母親は先に家に戻った。そ

*筑波大学大学院歴史・人類学系研究生

れから、近くにある知り合いの葬儀社の人が来た。暫くして救急車のサイレンが近づいてきた三叔、三嬢と市内に住む大姑(祖母の長女、私は大姑と呼ぶ)は担架に載せられた祖母に付添い、応接間に入った。葬儀社は祖母を用意した板の上に運んだ。酸素マスクを取りはずし、母親、三嬢、大姑三人はお湯で祖母の体を拭き、七「重」(七枚、台湾では寿衣の数えは「枚」ではなく、「重」である。しかも、必ず奇数で、普通は五か七「重」であるが、多い場合は九か十一「重」もある)の寿衣を着せた。金の指輪、髪飾り、真珠のネックレス、玉のブレスレットなども付けた。「安穿」(死者の生前の衣服を脱ぐ、寿衣を着せることを「安穿」という)後、家門の前に銀紙で囲まれる「魂轎」(紙で作った小さな轎だが、二人で担ぐ。天に送って死亡を知らせるためである)を燃やした。

「土公仔」(台湾語の発音、葬式業務を代理してくれる人)は遺体の回りに銀紙で固定し、「寿被」(死者用の布団)を被せてから、家族に「これでよろしいですか」と聞いた。要するに「寿終正寝」という言葉で表現された「正寝」のことを遺族に確認してもらい、冷蔵庫へ移すのである(出棺日まで置かれる)。それから、「脚尾飯」(死者の足下に白いご飯の真ん中に塩つけアヒルの卵が置かれ、卵の両側に箸を立てる。死者はこれを食べ、力をつけてから、他界の道へ向かう)を供え、「脚尾灯」(他界へ行く道を照らす)をつける。そして「脚尾銭」(他界へ行く旅費)を燃やし(亡くなった晩から翌日の朝まで、平均20分おきに銀紙を燃やした)、経を唱える(24時間お経を唱えつつある小型ラジオを使う)。家族はその夜「守霊」のために徹夜した。

翌日の朝、家門の入口の柱に「慈制」を貼り、入口に真っ赤な布(長5.6尺・幅3尺)をぶら下げる。これは隣近所にわが家には長寿者が亡くなったことの知らせである。屋外には臨時霊卓を設け、訃報を聞いた親友はここで線

香を上げる。

祖母の生前に使った洗面器、タオル(洗面器にタオルと水を入れる、毎日の朝、水を入れ替える)、歯ブラシ、歯磨き、コップ、衣服(毎日新しいものを替える)、靴などを冷蔵庫前の低い椅子の上に置く。毎日早晚二回、臨時霊堂の机にご飯とおかずを供える。これは俗に「孝飯」と言う。「事死如事生」(亡くなくても、生きている間のように孝行をする)のもっとも具体的な表現であろう。

「土公仔」の話によると、祖母は21日の夜11時30分に亡くなったのだが、「時辰」(昔の時間を表す単位、十二支で言い表す)から言うと、11時4分を過ぎたら、翌日の「子時」(22日)となる。そうすると、祖母は22日の朝ご飯さえ食べてない中に亡くなったことになる。祖母は子孫のために「留三頓」(三食を残す)したので、これは大吉だという。逆に晩ご飯後亡くなったものは子孫に何も残さず、将来、子孫たちは貧乏になる。それ故、三食を食べてから亡くなった者の家には「乞米」儀式を行う(註3)。

この期間中、父親の兄弟は毎日葬式の手はずについて話し合った。墓地の場所の選択や出棺日の行列(「陣頭」)の手配、誰が何の費用を出すかなどである(註4)。両家の屋外の歩道は供え物や花がこなどの置き場となった。祖父が供え物を見ながら「生前のばあさんはあまり食べなかったのに、今になって、こんな沢山、どうやって食べ切れるだろうか」と言った。

7月26日

七日目の朝の法事を行うため、わが家の前にある四車線大通りの一車線を占めた所に法壇が設けられた。車両の往来に不便をきたすが、「葬式だから、しょうがない」というのが一般市民の考え方であるから、「葬式迷惑」は大都会ではない屏東市内では多少大目に見てもらえる。

法壇内の机には真っ赤な布が敷かれた。夜、

法師が法壇の下見にやって来た。そして明日午前九時、蘇姓の子孫は全員揃うようにと言った。

私が7月25日に家に着いた時には、「脚尾灯」はもう飾ってなかったが、「脚尾飯」はまた冷蔵庫の前に置かれていた。祖父に「なぜ「脚尾飯」の真ん中にアヒルの卵を置き、ニワトリの卵は駄目ですか」と聞いたら、祖父が「昔の人はこのように教えてくれたから。なぜアヒルの卵なのか分らないが、人が亡くなった時に、『あの人はもう蘇州へアヒルの卵を売りにいった』（那人已到蘇州賣鴨蛋了）をという例え話を聞いたことあるだろう。」と言った。

臨時靈卓の横側には細い赤い布で結んだ竹の棒があった。竹の天辺には葉っぱがついていて、黄色と白い帯布が傘状の形になっている。傘の真ん中から長さ三尺七寸、幅三寸七分の白い布（三魂七魄を意味する）がぶら下がっている。これは死者の靈魂を呼ぶためのもので、「幢幡」と称するが、「孝幡」、「旛仔」ともいう。（写真3,4）。「幢幡」は葬送儀礼において非常に重要なものである。これと靈魂不滅信仰とは密接な関係がある。『易経』には「遊魂為變」と書いてあるように魂は人の精神で、肉体と離れても存在すると考えられている。「幢幡」の右側に「金童接引西方地」、左側に「玉女隨即極樂邦」と書いてあることから靈魂不死不滅説が信じられているのである。

夜、葬儀社の人が納骨罐の見本と「紙厝」（紙で作った家）の写真を持ってきた納骨罐の素材は大理石、花崗石、玉石などがあり、外側には細かい彫刻が刻まれているが、いずれも高さ30センチ、直径20センチぐらいの円筒形である。値段は一千元から三万元ぐらいである。「紙厝」は細竹で紙家の形を作り、外側に鮮やかな色紙を貼ったもので、高さは約200センチある。伝統的な中国式建物もあれば、西洋式な建物もある。値段は八千元から四万元ぐらいと様々である。祖父は祖母に八千元の玉石製納骨罐と一万三千元の「紙厝」を選

んだ。

7月27日（「做頭七」）

今日は祖母が亡くなって七日目である。民間信仰では、この日に死者を済度する「頭七」という法事を行う。俗に「做法事」とも言う。民間信仰では、経を唱え、その功德によって死者は地獄の苦界から救われると信じられている。

「做法事」を「做功德」、「做功果」、「做道場」、「做齋」とも言う。仏教の説によれば、「一般の人が亡くなった時に、大善が大惡の者は早速天界或いは地獄へ行かすが、殆どの人はすぐ転生することができない。その靈魂は鬼魂と違い、「中陰身」或いは「中有身」といい、転生の機縁を持たなければならない。転生を持つ機縁は普通七七四十九日が必要である。従って、この期間内で法事をすれば、効果が上がる」という（註5）。

朝7時30分頃、七名の法師（家で修行する者、「在世出家人」という）が法壇に来了。法壇の入口では一枚一枚の色紙の上に「啓建水陸懺会超薦道場」という文字が飾られている（写真5）。法壇内の一番奥には五つの仏像画が掛けられている。左側から右側の順で見ると、「南無普賢菩薩」、「極樂世界阿彌陀仏」、「南無本師釈迦牟尼仏」、「消笑延寿藥師仏」、「南無文殊師菩薩」の五仏である。五つの仏像画の下に設置された神机には19枚の「疏文」（神様に対して意見や事実を筒状書きにして申し延べる書文（註6））が置かれている。もう一つの机には「境主諸神」を祭る。道場の左側には「南無地藏王菩薩」、「第二殿楚江王」、「第四殿五官王」、「第六殿卡城王」、「第八殿平等王」、「第十殿轉輪王」、「南無伽藍聖衆菩薩」（護法）の絵像が掛けられ、右側には「南無觀世音菩薩」、「第一殿秦廣王」、「第三殿宋帝王」、「第五殿閻羅王」、「第七殿秦山王」、「第九殿都市王」、「南無護法諸天菩薩」（護法）の絵像が掛けられている。二つの「護法」の絵像の下にも机が設置されている。「南無護法諸天菩薩」

の側に「蘇府歴代祖先位牌」が安置されている。(写真6)

今日から五日間(27日～31日)に、以下の経を唱える。「慈悲三昧水懺法(上, 中, 下巻)」、慈悲藥宝懺(上, 中, 下巻)」「慈悲十王妙懺法(上, 中, 下巻)」、地蔵菩薩本願經(上, 中, 下巻)」、觀世音菩薩普門品(1巻)」、八十八仏法名宝懺(上, 中, 下巻)」の六つの経文である。

今日の法事は10時30分から19時(正午2時間の休憩時間を設ける)の間に行われた。「做法事」の時に遺族は法師たちのしぐさに従い、拝んだり跪いたりするので、非常に疲れる。毎回の経を読む時間は平均一時間程度で終わるが、これが一日六回続く。一時間には大体以下の手順を踏む。法師は鼓を打ち、参加者はまず、六本の線香を持ち、五仏、境主諸神、伽藍護法、南無護法、祖先位牌(「請祖霊」、歴代祖先の靈魂を法壇まで来てもらう)、祖母の臨時靈卓の順で線香を一本ずつ上げる。それから、主祭法師は遺族の一人に「執爐」させ、経を唱え始める。参加者は法師たちの後ろに三、四列に並んで、法師たちに従い、拝んだり跪いたりする。ある時はずっと跪いたままである。ある時は立ちつくしである。法壇内での誦経が一段落終すると、五仏に線香を上げ、屋外に安置された臨時靈卓へ移し、又、経を唱え、拝んだり跪いたりする(毎日最初の誦経時間には、主祭法師は必ず「幢幡」を取り、肖像の前で振り回し、計報に載っている子孫の名を一つ一つ声に出して読み上げる)。靈堂の誦経が終わると、再び法壇内に戻り、祖先位牌に線香をあげてから、一時間の経が終了する。

この日、最後の経が終わる前に、参加者は靈卓の所から跪いたまま応接間に安置された靈柩の所へ入った、男は靈柩の頭の所を叩き(一回)、女は靈柩の所で泣いてから、再び跪いたまま外へ出た。

法事終了後、靈卓には団子汁を供えるが、

箸は置かない。法師は次のような民間伝説を語ってくれた。死者が亡くなって七日目には、死者は未だ自分が亡くなったことを知らないため、なぜ自分の子孫が一堂に会し、泣いているのか、正月や「冬至」の節分でもないのに、なぜ机の上に団子汁が置かれているのか不審に思うが、団子汁は食べたい。しかし、箸がないので、手で団子を取ろうと手を出したら、指の爪は全部落ちていく。その時、死者は自分がもうこの世にいないことを知るのだという。伝説から分かるように、「頭七」の日に団子汁を供えるのは、死者に死を知らせるためであり、食べさせるためではない。

最も近い親戚が来たら、必ず冷蔵庫の黄色絹布を開け、祖母の顔を見る。誰もが祖母の顔を見て「顔色がいいですね、まだ生きてみたい」というが、今日三姉はいつものように祖母の顔を見てから「額に青色の跡が付いている」と言った。もしかしたら、祖母の靈魂は本当に今日肉体を離れていったのかも知れない。

祖父は「做法事」が死者を地獄の苦界から救うために行くという謂れを信じていない、「これはただ『瞞生人目、報死人恩』(台湾語の発音、死者に法事儀式を行うのは社会大衆の人々に見せ、我々は死者の恩情を報いているためである)のためだ」と言うだけであった。

7月28日

今日は「慈悲藥師宝懺」を唱える。これは祖母の病気を治すための祈りである。経を上げる前に漢方薬の「四物」汁を作った。これを祖母に捧げる。

経を唱える時に、女家族三人は行列の前に跪き、真ん中の人は「四物」汁を入れた急須を持ち、隣の二人はそれぞれ茶碗を持つ。法師の鐘に従い、真ん中の人は薬を両側の茶碗に注ぎ、両側の者は茶碗を高く挙げ、五仏に向いて捧げる。それから、捧げた薬を井へ入れる。これを三回ほどくり返してから、薬を入れた井を持って、祖母の靈卓の前に捧げる。

今日の法事は雨の中で、7時30分から18時30分の間に行なわれた。

法事終了後の仕事は、六か所（五仏、境主諸神、二つの護法、祖先位牌、霊卓）の机の供え者を片付けることである。法壇は道端に設置してあるため、埃が立ちやすく、真夏ということもあって、当日の供え者は殆ど捨てた。果物は翌日の朝まで置く。お菓子類などの腐りにくいものだけを各家に分けて食べてもらう。しかし、要らないと言う親戚もいる。忌中の家のもの（特に供え物）を家まで持って帰ることはタブーだからだ。

片付けた祖母の霊堂の机の上に又、新しいご飯、おかず、水と箸を捧げる（晩ご飯を意味する）。男（息子たちか長孫）が銀紙を燃やす（女にやらせない）。こうして一日の仕事が終わる。

7月29日

天気予報はまもなく台風が上陸すると言っている。気温が異常に高いし、蒸し暑い。朝八時から「慈悲十王妙懺法」を唱え始めた。法壇内では二台の扇風機が置かれているが、アスファルトの道から立ちのぼる蒸気に負け、法師たち、参加者の誰もが汗びっしょりだった。

三姉は「圧棺位」に使う品物を買った。霊柩を応接間から出す時に、もと霊柩が置かれた場所に碗、箸、米を入れた米桶、「発糕」、蠟燭を置く、これは「圧棺位」という「圧棺位」に使う品物は皆縁起のいい意味を表している。碗と箸は「添碗添箸」、子孫を増すという意味である。米を入れた米桶は子孫が米に困らないの意、「発糕」はその「発」の発音を取り、子孫に「発財」させるという意味である。用意した「圧棺位」の品々は赤い米桶五個、米十袋（一袋は五キロ）、碗と箸は各五ダースある。これは四人息子プラス長孫の五人分ダースある。これは四人息子プラス長孫の五人分である。

夜、「紙厩」が運ばれてきた。庭付きの二階

建てである。門の入口には「孝思堂」と書いている。門の前に召使い四人が並んでいて、車とバイクが置かれている。門に入ると、「揺銭樹」、車、テレビ、冷蔵庫、冷房、洗濯機、電話、ソファ、お風呂などの近代的生活設備（写真7）が揃えられている。しかも、家の所有権証明書付きである（写真8）。二階の応接間には祖母模様の紙人形が真ん中に座っている。満足そうな様子である。「紙厩」の作りは繊細で、中には電球が付いている。スイッチを入れると「紙厩」は明るくて幸せな家と言った雰囲気になる。暫く祖母の霊柩の前に置した。祖母はこれからも住む家があるので、きっと一安心するだろう。

7月30日

今日は「地藏菩薩本願經」を唱える。午前には祖母の「新厩」（紙厩）に「入厩」する（新居お祝い）儀式を行った。儀式が始まる前に紙厩の上に水、発糕、紅圓（甘い餡を入れた赤いおもち）、米（米に線香を差す）を供える。主持法師が紙厩の所有権証明書に住所、父親兄弟四人の名前を記入した。家族参加者は紙厩の前に跪く。法師は「幢幡」を振り回し、紙厩の所有権証明書の内容と子孫全員の名前を読み、又、縁起のよい言葉をたくさん唱えた。法師が一つの縁起のよい言葉を言う、参加者全員は大きい声で「有」と答えなければならない。最後に祖母の娘である筆者の二姑（祖母の次女）が全員を代表し、祖母に「阿娘（お母さん）、私は★★です、家の所有権証明書をここに置きます」と言いながら、紙厩の二階にある祖母人形の所に置いた。悲しみが込み上げてきた場面であった

昼の法事は夕べの6時に終わったが、夜の7時30分から「女兒句」が続く。これは娘たちが亡くなった母親の恩情を感謝する誦經である。主に娘と娘婿が主体となるが、嫁たちも参加しなければならない。「八十八仏法名宝懺」を唱える。誦經が終わってから、「蓮花金」（銀紙で蓮の花の形を作った）108個と「蓮花

座」(蓮花金の下に銀紙で座を作った) 36個を燃やした。燃やした「蓮花」灰は冷やしてから、ビニール袋に入れ、「庫銭」(死者にあげる紙幣)の灰とともに河へ流す。これを「放水流」と言い、俗に「寄水府」とも言う。

7月31日

朝5時頃、二階の寝室から屋外の雑音が聞こえた。窓外を見ると、父親、三叔、堂弟たちは強風の中で道端に立てたテントを安定させようとしている。早速、二姑を起こし、一階へ降りた。

夜中に台湾南部を通りすぎた台風のせいでテントの中は、凄まじい状態であった。机の上に置いた花瓶や供え物などは散らかっている。祖母の肖像さえ上から落ちて来た。歩道に置いた花かごや祭具品などもほとんど倒れていた。

7時30分に法師たちが時間通りにやって来たが、強風はまだ吹いているし、テントの安定をさせるため随分時間が掛かった。法師たちも手伝ってくれた。9時頃にやっと、誦經を行える状態になったが、経を唱えている時も、強風と大雨はまだ吹き続けている。天気が悪いため、午前の誦經は二回で終わりにした。これで、五日間の法事は今日の午前中ですべて終わった。

法師が言うにはこんな悪い天気なのに我々は祖母のため、「做功德」としているのだから神様も感心するはずだ、きっともっとよい効果がある云々。

午後1時30分から「普施」が始まる(註7)。「普施」用のテーブルはテント内の「境主諸神」の前から二列に並んで行く。父親七人兄弟は一人ずつ卓、わが家は二卓(長男と長孫)、祖母の実家から一卓、近所に住んでいる姻戚関係親戚は一卓、全部十卓のご馳走が用意された。一番前には六つの椅子が置かれ、「普施」中、家族の誰でもいいから、座ってもらう。一人は必ず「幢幡」を持って座る(写真9)。これは死者から「好兄弟」たちにご馳走を上げる

ことを意味する。

テーブルには各家が用意した様々な供え物を置くが、蘇姓子孫のテーブルに欠かせない供え物は米である。各テーブルには二袋、計16袋の米がある。もう一つのテーブルには木製のサンダル、香水、針線、化粧品、ピン櫛、櫛、マージャン牌、中国将棋などが置かれている(写真10)。これは「好兄弟」たちの機嫌を取るための道具である。

法師たちは「境主諸神」の前に座っている。「普施」の時間に経を上げる。時間を暫く立ってから、主拝法師が仏教の真髓を家族に説教した。最後に小銭をお菓子を投げる儀式がある。法師が「小銭とお菓子が地上に落ちてから、拾ってください」と言った。これらはもともと「好兄弟」たちに捧げるもので、地面に落ちる前に人間が空中でキャチしたら意味がなくなるという。

「普施」の間に雨が一時止んだので、葬儀社の人は先にわが家の近くにある空地に「庫銭」を積みに行った。

「普施」が一段落し、家族全員は葬儀社から準備してもらった葬服(註8)を着けて、「庫銭」を燃やしに行った。手伝ってくれた親戚は「普施」現場の留守番をした。出発する前に家から水を入れた大きな薬罐を持っていった。中型トラックで「紙厝」、祖母の生前の着た洋服、化粧品などを空地まで運んだ。家族行列は主拝法師の後ろに並んでいる。

歩いて5分程の距離で空地に着いた。「庫銭」で作った円形小城の模様が見えた。その前に「紙厝」が置かれ、「庫銭」の一番上には108個の「蓮花金」が飾られた。祖母の洋服と化粧品は下の段においた。「土公仔」は細長い白い布を家族全員に持たせ、我々は「庫銭」を囲んで円形になった。法師はまず「紙厝」の前に経を上げ、「庫銭」の明細(全部でいくら、誰がいくらを出したなど(註9))を読みあげた。それから、弟(長孫)が、「紙厝」に火を点けた。火を燃やししながら、「幢幡」を持っている

父親が「阿娘（お母さん）、早く『庫銭』をもらいにきて、早く『紙厩』をもらいにきて」と大きい声で繰り返し、家族全員は父親の声に従い、同じことを言った。間もなく「紙厩」が燃えつきて崩れると、「庫銭」を燃やし始める（写真11）が、その時小雨が降ってきた。堂弟二人は「庫銭」が燃え尽きるまで空地に残り、家族全員は先に家に戻ることに決めた。二叔は薬罐の水を注ぎながら、燃えている「庫銭」の三周を回り、家族全員はその後ろについた。そして帰り道、薬罐の水を少しずつ、水が足りなくなならないように注意深く道に注ぎながら、最後に家の台所の蛇口（水の源）の所にたどり着いた。

「普施」の供え物を片付ける前に銀紙を燃やさなければならぬ。旧暦の七月なので銀紙をたくさん燃やした。二つのドラムかんと三つの一般家庭用の金銀紙を燃やす鉄かんで燃やすのに、一時間も掛かった。夕べから告別式会場の飾り付けを始めた。祖母の肖像は臨時霊卓から告別式会場に移された。

明日の朝の7時30分に「遷棺」をするため、親戚たちは今晚わが家に泊まることになった。「倣頭七」の前日から家族全員は毎日昼、晩の二食とも菜食弁当を食べた。今晚もまた、全員菜食の弁当で済ませた。食後、父親や叔父さんたちは明日の告別式や出棺行列などの手配をした。他の者も自分に当てられた仕事をした。弟と四叔は「庫銭」を燃やす空地へ行き、二人の堂弟と交代した。堂弟たちは家で食事を済ませてから再び現場へ戻った。堂弟の話によると、小雨が降り続けているので、「庫銭」が燃えにくくなっているという。二人は翌日の朝5時まで空地にいたそうだ。

8月1日（旧暦7月6日）

昨夜ずっと雨だったのに、今朝は曇り空で、雨も止んだ。それほど暑くなくてよかった。

6時30分頃に棺木を家の外に運んできた。父親の手に一袋の米を持ち、跪いたまま応接間から出て「迎棺」をした。米を空の棺木の

上に置く、これを「圧棺米」という。空の棺木の上すでに用意された一束の藁があった。米と藁を棺木の上に置いたまま、応接間まで運んだ。二人の「土公仔」は祖母を冷蔵庫から運び出した。それから、家族全員は跪いたまま祖母の遺体の側を通過し、綿袋の中の小銭（「手尾銭」）を指でゆっくり挟んで出す。（写真12,13）。これは祖母の形見である。三姉は寺からもらった「朱砂」を祖母の額に付けながら「お母さん、明るい所へ向かって歩いてください」（「朱砂」は死者に光を与える）と言った。その後、7時30分の納棺「時辰」まで待つ。「時辰」が回ってくると、「土公仔」が棺木を開けた。中は綢製のマットが敷いてあり、豪華で奇麗な感じで、伝統的な棺桶のおどろおどろしいイメージではなかった。「土公仔」が銀紙の束を棺木の底にしきつめてから、白い布をその上に敷いた。それから祖母の遺体を棺木に移し、それに柳の枝、豆鼓、おにぎり、石、綿袋（註10）などを入れる。「土公仔」がそれらのものを入れる時、それぞれの物について祖母に説明した。例えば、柳の枝を入れる時に「お祖母ちゃん、これは犬を追い払いに使います」とか、綿袋を入れる時に「お祖母ちゃん、これはあなたの子孫たちがあなたにあげる旅費です」などを言いながら、ものを遺体の側に入れるのである。最後に黄色綢布を遺体に覆って「お祖母ちゃん、これはあなたの娘たちがあなたにあげる布団です」、その上に柄布を覆って「お祖母ちゃん、これはあなたの息子たちからのです」と言った。霊柩の蓋を閉じる前に一人ずつ二、三枚の銀紙を霊柩に入れた。やがて霊柩の蓋を閉じる時辰が回ってくる、「土公仔」が、「この瞬間、見たくない人は今目を背けてください」（註11,写真14）と言ってから、蓋を閉じた。その後霊柩を応接間から告別式会場へ移す（写真15）。元霊柩を置いた場所には「圧棺位」の品物と「発糕」、蠟燭を置いた（写真16）。これで納棺儀式は終わった。

告別式は8時30分から始まった。参加者は告別式会場の両側に座る(写真17,18)。儀式の過程は次の通りである。まず遺族から死者を祭る。家族の長幼の順序で祭る。①息子と長孫、まず皆、霊卓に向かい、三跪九叩(ぬかずく)の礼をし、茶を捧げ、中の一人が皆の代表で花を捧げ、一人は果物を捧げる。跪いたまま会場から霊柩の所へ行き、起立する(写真19)。

②嫁と長孫嫁、③娘、④内孫、⑤内孫女(以上のものの祭り方は①と同様)、⑥娘婿、⑦外孫、⑧外孫女、⑨孫娘婿(以上のものの祭り方は①と同様だが、跪くまま会場から霊柩の所への礼を省略)、⑩内外ひ孫一同(一回跪き三回ぬかずく)。次に同姓親族、その他の親族(嫁姻戚関係、娘婿姻戚関係を含む)の順である。主祭者は皆を代表し、線香を上げ、茶、花、果物を捧げ、三回おじきをする。それから、団体の弔い(親族ではない者)を行う。同じく主祭者は皆を代表し、線香を上げ、茶、花、果物を捧げ、三回おじきをした後、遺族へ一回おじきをする。それに対して遺族(息子、嫁、長孫、長孫嫁、娘)がお礼を返す。最後に個人の弔いを行う。参加者は両列を並び、二人ずつは「拈香」をし(線香粉を高く持ち、肖像に向かっておじきする)、遺族へおじきする。遺族がお礼を返す。参加者の弔いの儀が終わると、司会者と息子、嫁、長孫、長孫嫁、娘たちは肖像の前に跪き、祭文を読む。その後、祖父は祖母に線香をあげ、子女たちは祖父の後ろに跪く。次いで、遺族全員は参加者に向かって跪礼をする。出棺する前に、法師が経を読み、家族全員は祖母の肖像に最後の跪礼をする。それから法師が先導をし、父親が「幢幡」を持ち、家族全員が霊柩を三周(「旋棺」)してから(写真20,21)、行列を整え、火葬場へ出発する。

出棺の行列際のは以下の順で行う。①長婿が「放路紙」(銀紙をまく、道路通行料金を意味する)、②開路鼓、③花車(2台)、④楽隊、⑤花車(2台)⑥八音団、⑦花車(2台)、⑧

エレクトロン、⑨花車(2台)、⑩法師車、⑪花車(2台)、⑫ラッパ、⑬霊柩車、⑭葬送行列。ちなみに出棺行列は必ず「放路紙」が先頭で、霊柩車と葬送行列が一番最後とされている、その間の「陣頭」には決まりはない。葬送行列は出発するときに遺族の40人を除いて、親戚友人約40人が参加する、家に一番近い橋の袂(歩いて約5分ぐらいの距離)で「辭客」(遺族は橋の袂で跪礼をし、見送りの方にここまでで結構ですという意味)してから、全員が車に乗り、火葬場に向かう。

20分後、火葬場に着く。法師の後ろで父親は「幢幡」を持ち、弟は両手で「棒斗」(木製の桶で中には五穀、釘を入れ、太い線香を真ん中に差している)をし、三叔は祖母の肖像を抱え(写真22)、火葬場内の空地に着いた。遺族専用の臨時霊卓に祖母の肖像を置き、法師は経を唱え、家族全員は線香を上げ、花を捧げ、それから、祖母肖像の反対側に向いてもう一度線香を上げる。父親兄弟4人と長孫、父親の義兄弟が腕を組んで跪く父親は祖母の臨時位牌を持ち(写真23,24)、法師が位牌に「点主」(註12)をしてから、「棒斗」の中のものを撒く(写真25)。霊柩の上には16個の蓮花金が置かれた。

遺体を火葬する時間は午後の2時なので、葬送行列にかわった一同は祖母の遺体を告別し、再び車に乗って帰ることとなった。これを「返主」という。「返主」する時にも「放路紙」が必要で、末婿が担当する。

「返主」の行列は家に入る前、「火龍」(棺木に置かれた藁を燃やす)を跨がなければならない。まず、喪服を脱ぎ、葬儀社の人に渡し、「幢幡」、個人の腕に付けた小さい粗麻、苧麻などを火に入れ、火の上を跨ぎ、「淨符」(付録2)の灰燼を入れた水で手と顔を洗い、飴玉を食べ、家に入る。これはケガレを清めるためのである。それから、祖母の臨時位牌を歴代祖先の位牌の前に置く(一周忌に、この臨時位牌を燃やし、祖母の名を歴代祖先の

位牌に入れる)。

昼、屋内で六テーブルのご馳走を用意し、手伝ってくれた親戚や友人とともに席についた。そしてタオル一枚、「寿金」(紙銭)一束、線香一束、発糕二個、紅圓二個を一組として親戚友人にあげる。

午後1時30分、家族は再び火葬場へ行った。祖母の霊柩は火葬炉に入れる直前、私たちは、蓮花金が置かれた霊柩に向かい「火が来るから、お母さん、早めに蓮花金に乗って逃げよう」と高い声で叫んだ。火葬場のスタッフも「火が来るよ、逃げよう」と言いながら、霊柩を火葬炉へ入れた。民間信仰の考えによれば、死者の靈魂を肉体から離れ、怪我しないように死者に注意を与えるのである。

40分後、真っ白な骨の残骸が出された。半分の頭骨と幾つの肢体が区別できるほかには、白い残灰と捻った玉のプレスレットの残片しか残っていなかった。私たちは祖母の骨灰を祖母の名、出身地、生年月日、死亡年月日を刻んだ納骨罎に納めた。法師は経を唱え、家族全員は納骨罎の前で線香を上げた。法師が小鐘を振りながら、祖母の靈魂を呼んだ父親は後ろに納骨罎を抱え、三叔は父親の側に黒い傘をさす(納骨罎を天に見せない)。それから、祖母の骨を高雄の仏光山墓園へ送った。車に乗る前、橋を渡る前、車から降りる時に父親が祖母に「お母さん、今、車に乗るよ」、「お母さん、今、橋を渡るよ」、「お母さん、今、車から降りるよ」と声を掛ける。

台湾南部の仏教聖地である仏光山の仏堂で経を唱えてもらい、祖母の納骨罎を室外にある個別な鐘型霊骨搭に納めた(写真26)。祖母の葬送儀式はこれですべて終わった。

以上祖母が亡くなった晩から出棺日の12日間に行われた伝統的な葬送習俗と過程を紹介した。「生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮」「唯死可以當大事」といった昔の言葉から分かるように、台湾地域では伝統的な葬儀の礼は非常に大事なことと考えられている。祖母

の葬送儀式に参加して幾つか気づいた点を下記のようにまとめた。

葬儀と面子

近代化の進む台湾地区において葬儀はまさに遺族の面子を発揮する場となった。祖父が言った「瞞生人目、報死人恩」の言葉の通りである。葬儀はたくさんの金銭を使い、大勢の人々を集めることが孝行を示すこととなるのである。

一、費用

今回の葬式に使った費用は墓地の契約を加えると、約200万円(日本円700万円)をかけた。その中に燃やされた“金”が多い。一晩中で燃やされた「庫銭」の4万2千元と五分間ぐらいで燃やされ「紙厝」の1万3千元だけでも大学新卒生の初任給料の二か月にあたる。他に燃やされた「紙銭」の金額を加えたら十萬元弱にのぼる。法事の費用は五日間で12万5千元で、他の法事(「女兒句」、出棺日の誦経、墓園までの「引魂」など)は別に計算する。葬儀社からの明細表(付録3)を見ると、「放寿」(空の棺木を家まで運ぶ)、「出山」(遺体を入れた霊柩を運ぶ)は各七名と明記されていたが、実際に二名しか来なかった。楽隊、開路鼓、電子琴、八音団などは2時間で5万2千元かかった。雑費として場合によって「紅包」(チップ)をあげなければならない。これは「穢氣」を取るための慣例である。例えば、火葬場のスタッフたちに一人ずつは五百元を配る。「返主」後、家でご馳走を作ってくれる料理屋のスタッフたちにも一人ずつに二百元の「紅包」を配った(スタッフたちは喪主に直接要求する)。祖父が「死人錢好賺」(喪家は金離れがいい)と言った。

二、「奠祭品」(供え物)及び「白包」(弔問金)

嫁姻戚関係、娘婿姻戚関係、弔問客たちは何らかの「奠祭品」或いはいくらの「白包」を送ってくれるのに対してことについて詳し

く記録するのが重要である。これは将来お返す時の参考にもなるし、「禮尚往来」のよりどころにもなる。お金を送る場合は必ず奇数でなければならない。

葬儀に登場する遺族

台湾の葬式習俗においては父系社会の特徴が見える。息子たちと長孫の存在が極めて重要である。長孫に「長孫頂尾子」(台湾語発音、長孫は末子の如く)という言い方があるのも頷ける。次に嫁、長孫嫁、娘、内孫の順となる。死者の配偶者は最後の告別式で肖像に線香を上げる以外の他の葬儀過程では表に出ない。遺族は忌中、なるべく他人の家へ行かない、買い物する時にお店の外側で頼み、中に入らないようにする、つまりケガレの観念があるからである。

法事

今回の法事は主に仏教式法事を行ったが、実際に道教儀式も含まれていた。例えば、仏教式の葬送儀式では遺族は泣いてはいけないという、遺族が泣いたら、死者の靈魂がそれを聞いて自分も悲しくて肉体から離れられなくなり、転生が遅くなると言うのだが。「做頭七」の日、法師が女家族は必ず靈柩の側で泣かなければならないと言った。このように法事は仏教、道教、民間信仰に基づいているのである。

まとめ

漢族社会における葬儀礼儀は複雑で多様性であるため、葬式の体験がない遺族は、葬儀の専門家の言う通りに従うしかない。いくら頑固な人や聞き分けのない子供にも葬儀過程で「跪拜」「叩首」などと言われたら、反抗できず、言われた通りにするしかない。軟弱な死者は生きている時には自分がこれほど人の行動を左右する力を持ち得るとは想像もつかないに違いない。「死」の力は大きいと感じた。

台湾の葬送儀礼は社会形態の変化と生活水準の向上に伴い、少しずつ省略を余儀なくされている。地方の葬式で整っている場合は伝統的な儀礼を行えるが、台北のような大都会では住む空間に限りがあり、葬式を行う時の「葬式迷惑」も考えなければならないため、伝統的な儀礼が行われない場合が多い。現在、都会の葬式は殆ど「殯儀館」(葬儀を営む公共施設)で行われている。遺体は病院から直接「殯儀館」へ運ばれ、法事や告別式も「殯儀館」で行う。たまたま大吉の日にあたり「殯儀館」の来訪者が多くて賑やかになるため、告別式に参加する者は慎重に喪主を探さなければならない。「放路紙」などの習俗は「殯儀館」の出口までしかやらせないそうだ。

台湾では現在、火葬化を提唱されている。屏東市民の例を上げると、火葬をする場合は市政府の関係部門から6000元の補助金が出る。ところが、死者を「二度、死なせる」という火葬の“痛み”を避けたいとの考え方も根強い。地方では土葬はまだ一般的である。

最後に、葬儀過程で行われた様々な儀式を通して至った結論とは、葬儀とは故人を偲ぶというより、むしろ生きている人に行われると言っても過言ではないという一点であった。

註釈：

- (1)伝統的作法によれば、男は応接間に、女は寝室に置く。移す場合は男は応接間の右側に、女は応接間の左側に置くが、現在男女問わず、皆応接間の右側に置く(『台湾地区現行喪葬禮俗研究』P. 10により)
- (2)この冷蔵庫の温度が遺体を固くならないよう、常に0℃に保たれている。レンタル会社の人は三日おきに検査に来る。費用は一日500円で、運搬費は4500円である。
- (3)「乞米」の方式は地方によって違う。高雄鳳山の例では「孝飯」を減らす方式をとり、子孫にご飯を残す意味する。高雄県美濃の例では三つの赤い三角形袋を作り、中に米

を少し入れて、一つは霊柩の中に入れ、他の二つは遺族がもらう（前掲書 P. 23 により）。

- (4) 高雄仏光山墓園の永久使用権は120万元で契約した。また、将来祖父が亡くなる時に墓園を入れる使用権として120万元の一割の12万元、計132万元を払った。出棺日の「陣頭」の費用には個人の名で出費する。内訳は次の通り。八音団：12000元（呉輝郎、父親の義兄弟）、電子琴：7000元（蘇素娟、私の妹）、開路鼓：9000元（吳明川、父親の親友）、霊柩車：15000元（娘と婿、6人）である。

- (5) 前掲書 P. 33

- (6) 圓覺地、妙覺地、等覺地、普門品、超樂界、洪金宝懺、十王地、普賢王、地藏王、如来応供、開函宣礼、菩薩化身、三徳六昧、普照菩薩、普通供養、杵鎮魔軍、天厨妙供、酥醮妙供、四向菩薩。

- (7) 「普渡」とも言う。民間信仰によれば、旧暦の七月には冠婚葬祭の儀は一切行わない。しかし、どうしても出棺する場合は「好兄弟」（孤魂野鬼）にご馳走をあげなければならない。

- (8) 息子・嫁は粗麻布と粗麻冠・粗麻「嵌頭」（頭に覆う尖った布で、布の長さは腰まで伸ばす）、右腕（「慈制」は右手、「嚴制」は左手につける）には小さな粗麻を飾る。娘は苧麻（細かい麻）布と苧麻「嵌頭」、右腕には小さな苧麻を飾る。長孫・長孫嫁は粗麻衣と苧麻冠・苧麻「嵌頭」、右腕には小さな粗麻と苧麻（二枚重ねる）を飾る。内孫女は黄色「嵌頭」（綿のタオルで作る）、「嵌

頭」の尖った所に小さな赤い布が付いている、内孫は黄色帯で、その結びに合う所んい小さな赤い布が付いている、内孫・内孫女とも右腕には小さな苧麻を飾る。外孫女は白い「嵌頭」、外孫は白い帯、内曾孫、女は青い帯、外曾孫女はピンクの帯（以上のものも皆赤い布が付いている、腕には飾りなし）をつける。

- (9) 全部で6億の「庫銭」（42000元）を燃やした。この6億の「庫銭」の内訳は次の通り。

息子（4人） $7500万 \times 4 = 3億$

嫁（4人） $4000万円 \times 4 = 1.6億$

娘（3人） $3000万 \times 3 = 0.9億$

長孫（一人）0.5億

- (10) 陰府へ行く途中に犬に噛まれないよう、柳の枝で犬を追い払ったり。おにぎりを猛犬に食べさせたりする。石と豆鼓は配偶者の一方が先に亡くなる場合に置くものである。石が腐る時、豆鼓の芽が出る時に合いましょうという配偶者の長寿を祈るための意味である。

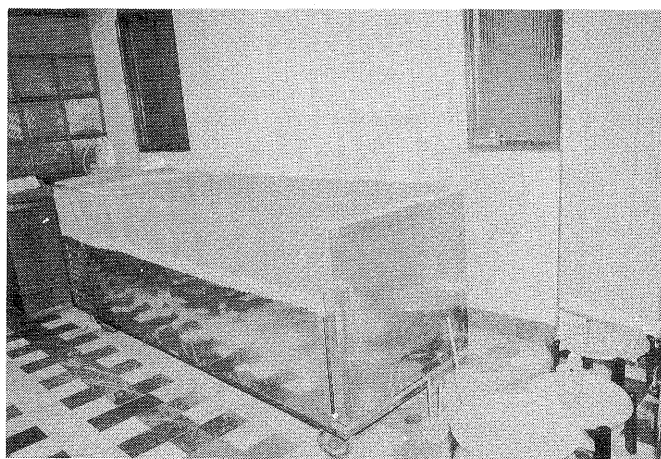
- (11) 人の影が霊柩の中に落ちたら凶である。影が霊柩の中に閉じ込められると、病気になる、甚だしい場合は死亡することさえあるという。

- (12) 「点主」は儒教儀礼のしつけである。孝男たちは墓に向かって跪き、背中に位牌を負い、主拝法師に紅砂筆で位牌の上に「点砂」をしてもらう（前掲書 P. 59 により）。祖母の場合は火葬で、墓地にもまだ行っていないので、霊柩に背を向け墓の仮地でへ跪いた。

〔参考図表，1995. 7. 21～8. 1〕



(1) 臨時靈卓



(2) 遺体を入れた冷蔵箱



(3) 幢旛



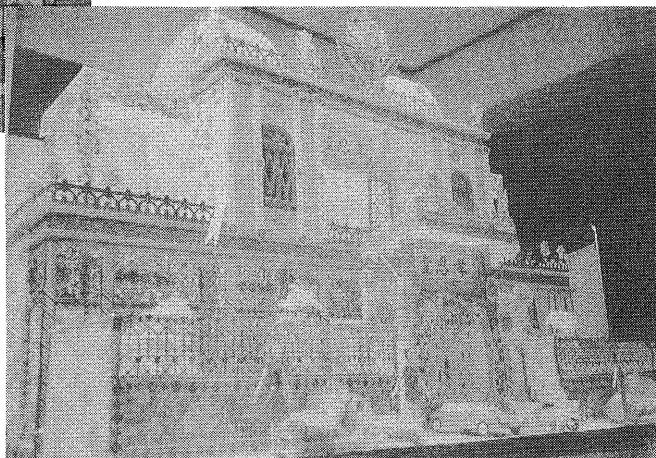
(4) 「幢旛頭」をつけた幢旛



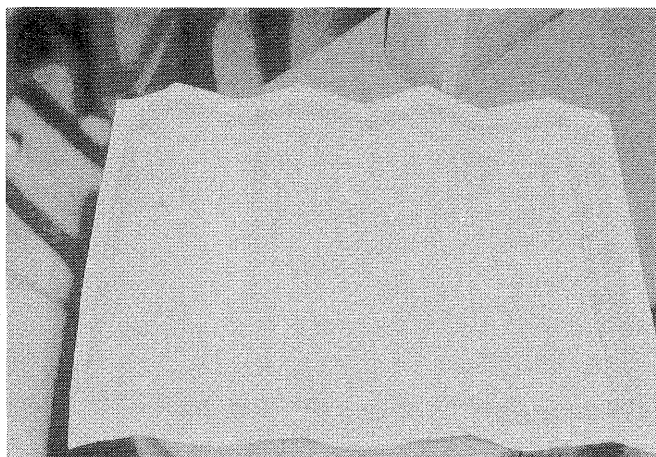
(5) 法事道場



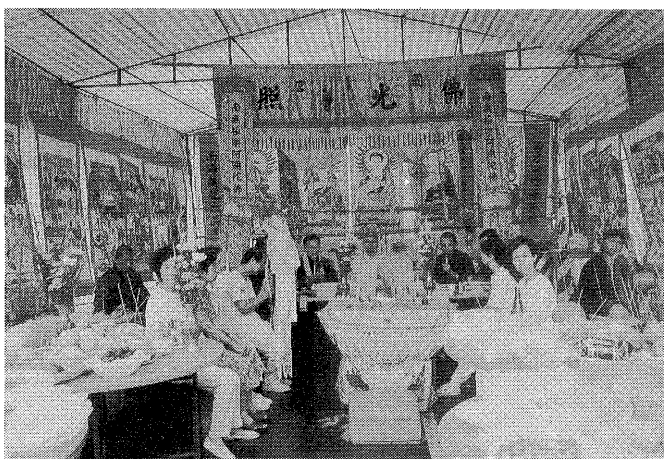
(6) 歴代祖先位牌



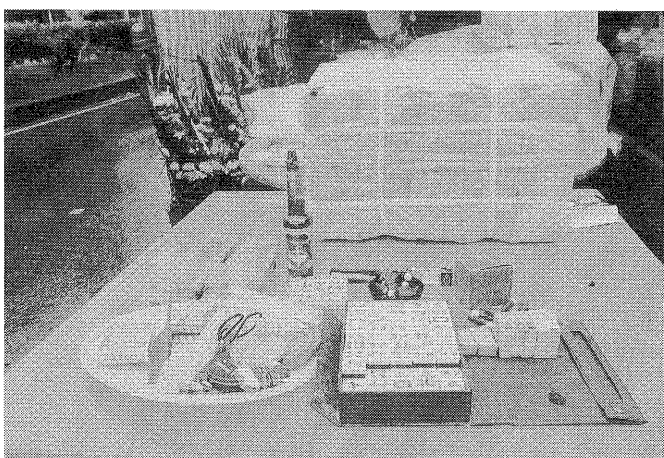
(7) 紙盾



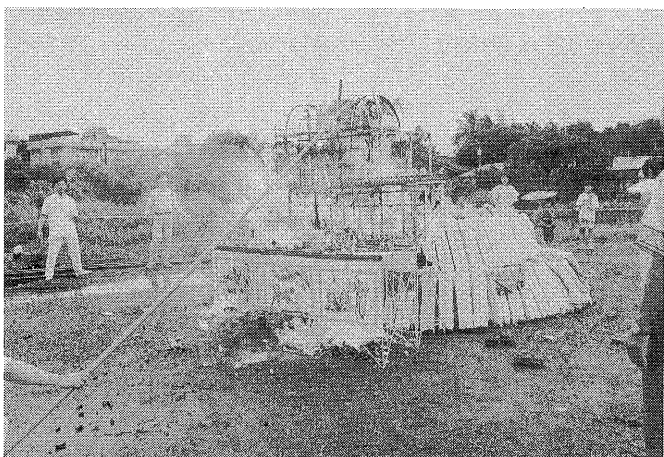
(8) 紙盾の所有権証明書



(9) 普施



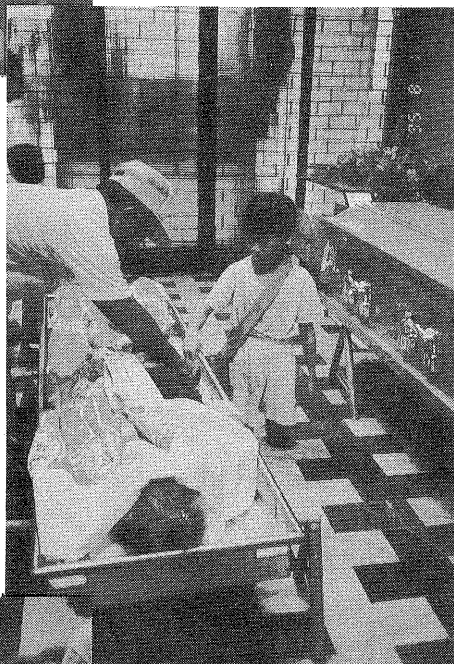
(10) 「好兄弟」のための供え物



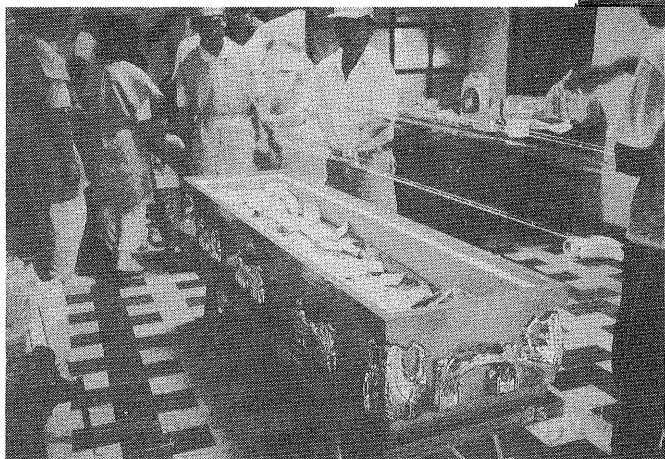
(11) 「紙厝」と「庫銭」を
燃やす



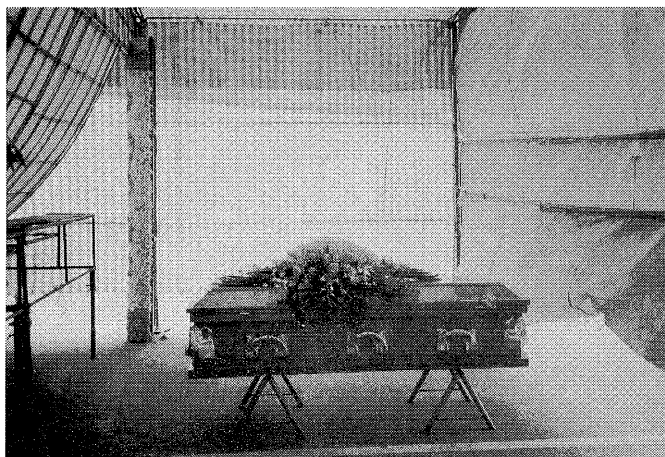
(12) 「手尾銭」を挟んで出す



(13) 「手尾銭」を挟んで出す



(14) 霊柩の蓋を閉じる



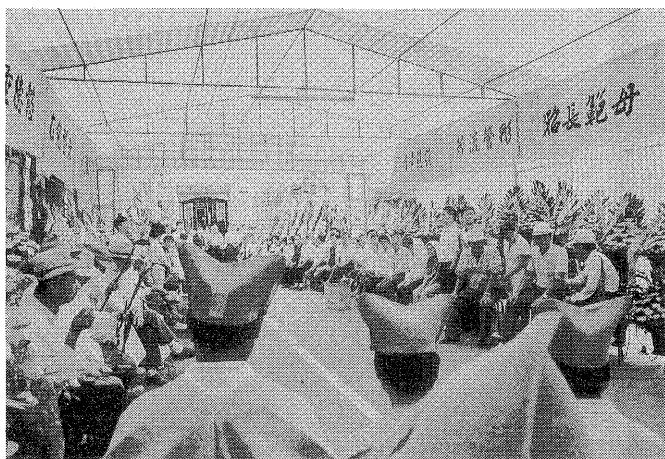
(15) 告別式会場へ移した霊柩



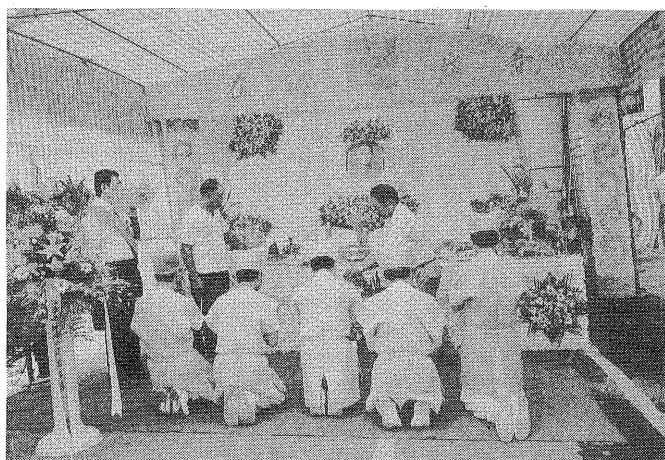
(16) 「圧棺位」



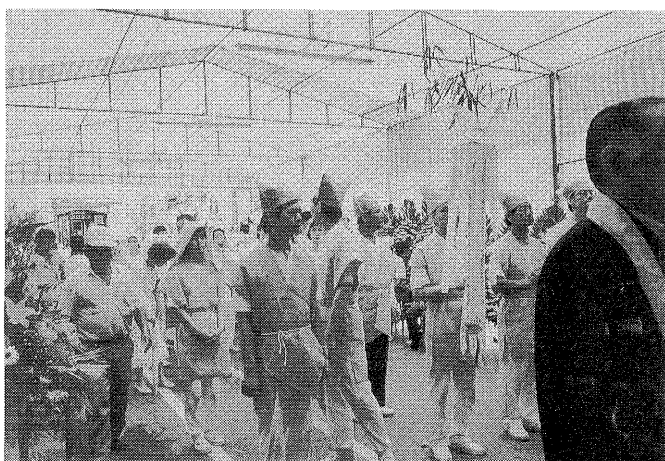
(17) 告別式場



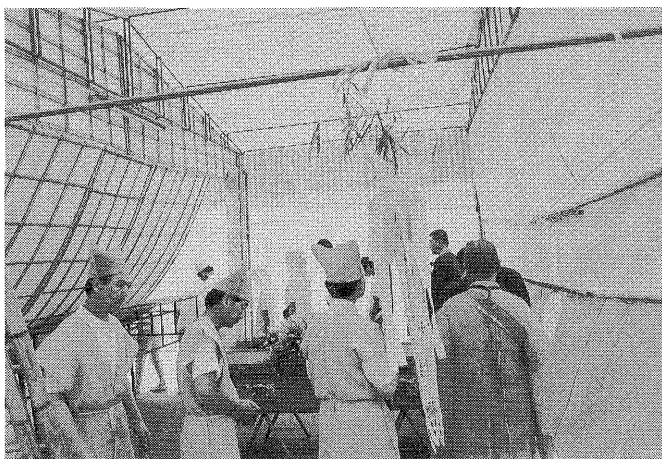
(18) 告別式会場



(19) 息子4人と長孫1人



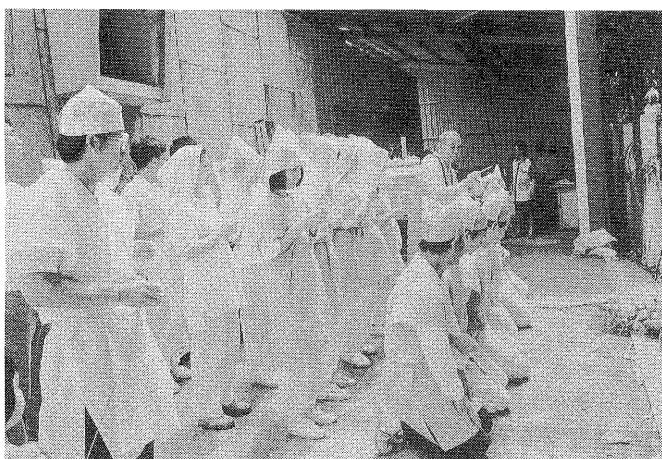
(20) 「旋棺」する前



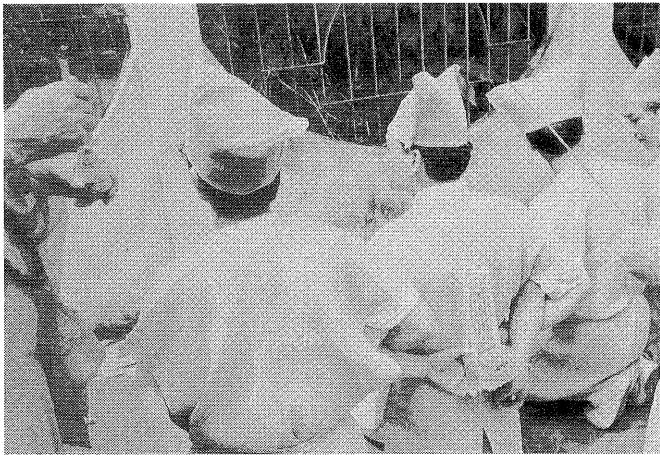
(21) 「旋棺」



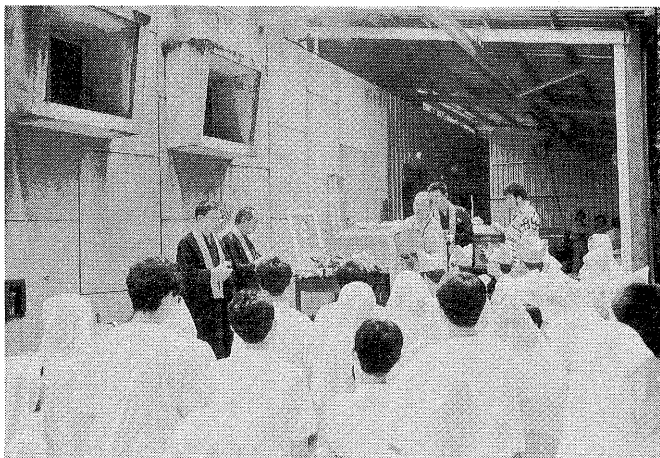
(22) 火葬場



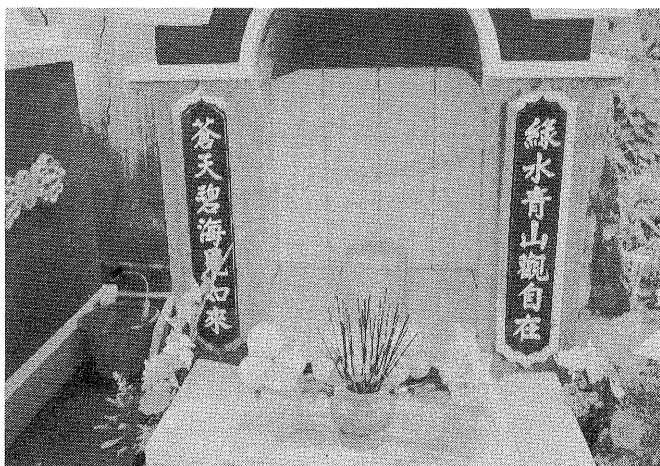
(23) 「点主」



(24) 「点主」



(25) 「棒斗」の中のものを撒く



(26) 高雄佛光山墓園

